

皿井千裕：18th International Society for Evolutionary Protistology (ISEP) meeting 参加記

2010年7月2日から7日の6日間の日程で開催された18th ISEP meeting (国際進化原生生物学会18回大会)について紹介します。本大会は石川県金沢市にある石川県立美術館にて、ローカルオーガナイザー遠藤浩氏(金沢大)、石田健一郎氏(筑波大)他4名により開かれました。シンポジウムを含め66題の口頭発表、35題のポスター発表が行われ、プロティスト(原生生物)を研究対象とした様々な分野の研究者127名が世界各国より集まりました。日本からは19題の口頭発表、22題のポスター発表があり、そのうち学生による発表は13題でした。英語での発表+質疑応答のやりとりは、私にとって大きな刺激となりました。

1日目は、大会の受付やミーティング、レセプションがあり、ここでは論文の著者として目にしてきた研究者、話で聞いたことのある研究者の方々に直接お会いすることができました。また、海外で活躍されている日本人研究者の方々とのお話はとても新鮮に感じられました。

2日目は、学会長であるPatrick Keeling氏(British Columbia大)によるISEP President's Lecture、とそれに続くGeoff McFadden氏(Melbourne大)の講演から始まり、Plastid and Endosymbiosis, Interesting Parasites and Viruses, Curious New Organisms and distinct lineagesのセッションが行われました。

3日目は、プロティストロジー分野の中心的人物の一人であるCavalier-Smith氏(Oxford大)のレクチャーにより始まりました。初めて見る氏の発表は、噂に違わぬアクティブなものであり、あまりの情報量の多さに驚き、ついていくのが大変でした。続くPhylogenyのセッションでは、微細構造の観察比較や分子系統解析などに基ついた、様々な原生生物群の系統関係や進化に関する発表が続きました。多様な原生生物の進化に関する議論が展開された本セッションは、私の研究に関連する分野でもあり、最も印象に残りました。午後にはMolecular evolutionのセッション、そしてピコプランクトンの多様性に関するシンポジウムも開催されました。個人的に環境調査やプランクトン調査の研究に携わる経験はあったものの、ピコプランクトンについてはこれまで馴染みがなく、このような

小さな生物を認識するためにどのような方法がとられているのかなど、河地正伸氏(国立環境研究所)をはじめ水産総合研究センターやCNRS ロスコフ海洋生物研究所に所属する専門の方々から直接詳しい話を今回聞いたのは大変有意義でした。またその多様性研究については今後の発展を強く感じる内容でした。

4日目はDay offが設けられ、半日コースの“和菓子作りと日本酒めぐり”、1日コースの“白川郷見学ツアー”のどちらかを希望して参加できるオプションツアーが企画されていました。私は甘いものが好きなので半日コースに参加しました。この日は、午前中にツアーで武家屋敷の見学、和菓子作りの体験、日本酒の試飲をしました。そして夕方、日本の学生が主体となってツアーで一緒だった人たちを焼きそば、お好み焼き、もんじゃ焼きのお店へ案内し、日本の食文化に触れつつ楽しいひとときを過ごしました。それにしても英語でのもんじゃ焼きの説明は難しかったです。

5日目はアピコンプレクサの痕跡的な葉緑体(アピコプラスト)と渦鞭毛藻類の葉緑体が単一起源であることを示唆した生物として知られている*Chromera velia*を主体としたセッションから始まり、ここではミトコンドリアゲノム、葉緑体ゲノム、脂質代謝、ヘム合成、鞭毛形成に関する研究が紹介され、この生物の注目度の高さが窺えました。続くDiversity and Phylogeography, Cell biologyに関するセッションでは原生生物のもつ多様性、及びその重要性を改めて強く認識しました。Phylogeographyに関する発表では、対象生物の形態的特徴のみならず分子系統の情報にも踏み込んだ深い議論がなされており、どれも新鮮で非常に興味深いものでした。その夜にはバンケットがあり、その後の2次会では若者を中心に30人近くがカラオケに流れ込み、パーティールーム・フリータイム・飲み放題で朝4時まで盛り上がりつづけていました。海外には飲み放題はないらしく、海外の方々はこの日本の料金システムが気に入っていたようでした。

6日目は、From mitochondria to hydrogenosomesのシンポジウム、Anaerobic Organelle and Metabolism, Insights into the Future of Evolutionary Protistologyのセッションがありました。ここではAlastair Simpson氏(Dalhousie大)やAndrew Roger氏(Dalhousie大)をはじめ、トップジャーナル常連の様々な分野の研究者が発表を行っていました。いまだ論争が続くトピックの現状とこれからの課題が整理された、まさに本学会の最後にふさわしい内容でした。

この大会は私にとって初めての学会でしたが、そこで色々な研究の話や世界が一気に広がり、もっと知りたいという意欲が湧きました。また、原生生物はやっぱ謎が多いし面白いということ。それから反省点として、多くの研究者の方々と話す機会があったにもかかわらず、どのようにコミュニケーションをとればいいのか分からずもったいない時間を過ごしてしまったことがありました。次からはもっと積極的に会話に参加し、知らない世界をもっと知る力をつけたいと思いました。

(筑波大学大学院生命環境科学研究科)

